



- It's happy days -



ゆみなの  
**FULL METAL COOKING**

小遊鳥<sup>たかなし</sup>ゆみなは入学当初、ここからすぐにも出たいと思っていた。

このフロールスは鳥かごで、ゆみなはその中の小鳥のような——そんなイメージを彼女は持っていた。

それからしばらくして、彼女はその鳥かごから自由に出入られるようになる。

文字通り、羽をはばたかせて、彼女だけが帰る場所に、いつでも飛んでいくことができる。だからかもしれない。

彼女は最近、フロールスでの生活にも余裕が出てきた。

クラスメイトや寮の班の子たちとも、仲良く過ごしているし、むしろ頼られている風でもある。

お嬢様学校であるが故に、ほとんどの子たちが比較的良い家庭に育っているからか、波瀾万丈な家庭環境で育ち、家事を一通りこなしていた彼女は、頼りになる大人の女性として見られてるのかもしれない。

裕理やアメリカは、素直であけない彼女しか知らない。

もしフロールスでのゆみなを知ったら、少なからず驚き、苦笑するだろう。

そして、彼女なら頼られて当然と納得もするだろう。

小遊鳥ゆみなは、そんな一目置かれる存在になりつつあった。

「ゆみな。ちよつといいかな？」

「あ、如月先輩。どうしました？」

食堂の片隅で同級生らと談笑中のゆみなに、美冬は声をかけた。

美冬は態度から、ゆみなは如月先輩と話してくると告げて、皆の輪から離れた。

「くつろいでいるところ、すまない。ゆみなに頼みたいことがあるんだ」

「何でしょう？ また事件ですか？」

ゆみなの言う「事件」とは、太転依と人とのトラブルのことだ。

鳳凰の加護を受けているから、ゆみなは美冬から時々相談を受けている。

太転依絡みのことを、みんなの前で美冬から話しかけられたことはない。

大抵は寮の司令室に呼ばれたり、裕理と一緒にいる時に話をされたりするくらい。

何か、大変なことがあったのかなと、ゆみなは緊張した。

「そう警戒しなくていい。太転依とは関係ないんだ」

美冬は真剣な面もちのゆみなに、苦笑で応えた。ゆみなもホツとした笑顔を見せる。

「ゆみな、君は料理が上手いと聞いている」

「え？ 上手い？」

「料理、できるんじゃないか？」

「あ、家事全般はできます。ゆみなの師匠は真理お母さんですから」

自分の自慢というより、裕理の母を自慢するように言った。

「それで、私に料理を教えて欲しいんだ」

「料理？ 如月先輩に？」

美冬は、はつきりとわかるようにうなずいた。

「ゆみな、特別料理が上手いってわけじゃないですよ？」

「それが謙遜なのはわかっている。ましろがゆみなから料理を教わったと言ってたからな」

「ましろお姉様が？ ゆみな、教えたことないですよ？」

「そうなのか？ ましろがゆみなに台所や道具の使い方や、おいしい肉じゃがの作り方を教えてくれたと言ってたぞ？」

「あ、それは……確かに……」

ゆみなは思い出す。

ましろが泉戸家にやってきたばかりの頃、台所用具の位置が自分の知らない場所になっていた。それがどうしても辛くて、許せなくて、ましろに当たったことがあった。

その時、ゆみなはましろの柔軟な態度に感心した。

だからゆみなは、真理お母さんから教わったことを覚えていた範囲で教えたことがあった。

あつと言う間に教えたことを覚えていくましろにかなわないと、その時思ったものだった。

「でも、とても教えたなんて言えないことでしたよ。ましろお姉様も別にゆみなが教えなくてもできていたことですし。きつとゆみの顔をたててくれているんですよ」

「そんなことはないだろう。ましろはそういう世辞は言わない。ゆみなに教わったことはましろにとつて糧になっているから、ゆみなに教わる方がいいと言ったんだと思う」

「へ？ ましろお姉様が、ゆみなに教わるように言っただけですか？」

美冬は、はつきりとうなずいた。

「それに今、ましろ達は遠征中だ」

「あ、はい。鳳凰さんも一緒に出かけているので、聞いてます。鶴さんも応龍さんも一緒なんですよね」

葦原町から離れた土地で太転依に関するトラブルがあつたということで、ましろ達は出かけている。

何が起るかわからないということで、応龍と鶴と鳳凰もついていっている。

「本当はましろに教わろうと思ったんだけどな。彼女の都合と私の都合が合わなくて、なかなか教える時間が作ることができないんだ」

「ははあ。それでゆみなにですか？ ましろお姉様の代わりが勤まるでしょうか？」

「あのましろの太鼓判だ。腕は確かだろう。それに毎日裕理にご飯を作つてやっているんだろ？」

「あ……はい……」

寮の消灯前後に、ゆみなは鳳凰の翼で空を飛び、裕理の元に通っている。

そのことは美冬も知っていて、暗に認めている。

太転依に関するトラブルが起る以上、裕理の力は必要であり、彼を支えているのがゆみなの存在であることを、美冬は認めていた。

端的に言うと、二人の逢い引きを認めている、ということになる。

「どんな食事を作っているのか興味もあるんだ。だから教えてくれないか」

「そ、そういうことでしたら、はい。およぼしながら微力を尽くして教授いたします!」

「そう畏まらないでくれ。それで時間だが明日の土曜はどうか?」

「大丈夫です」

「なら外出届けを出して外に食材を買いに行こう。そうか、調理実習室を借りられるかどうかは確認してないな……」

ゆみなは、そこでふと思いつく。

「そういうことでしたら、お兄ちゃんちのお台所でやりませんか? 一般的な家庭料理ということなら、調理場もそれに適した場所の方がいいんじゃないでしょうか?」

「なるほど、それはいいアイデアだ。是非そうして欲しい……が、迷惑じゃないか? 泉戸家の都合がよければいいが」

「はい。お兄ちゃんとお父さんに許可もらいます。でも多分、如月先輩なら聞かなくても大丈夫ですよ」

「そうか。ならお願いするかな」

「はい」

「料理に関しては私は素人も同然だ。できれば厳しくしつけて欲しい」

「そんな躰だなんて」

「それくらいレベルに差があるのは事実だろう。毎日家事を行っていた者と比べたら、家庭科で習った程度の技術などたかが知れている。だから厳しくして欲しいんだ」

「そ、そういうことでしたら……はい。厳しくします」

「ああ、頼む」

それから美冬は颯爽と去り、残されたゆみなは、再び同級生らと混ざる。

ゆみなは、ミレディといった何の話を? と興味津々に聞かれる。

外出許可ももらうことだし、やっぱり言っちゃまずいんだろうなあと思ったので、ちよつと相談を受けたと応えた。

皆、一様に驚く。

入学してまだ夏休みにも入っていない。なのにミレディに相談される。

ゆみなは、同級生達のさらなる尊敬の視線を集めることになる。

そんな注目に気づかず、ゆみなは明日のことを思う。

「厳しくかあ……どうすればいいかなあ……うくん……」

その日の夜、ゆみなは寮の消灯時間が過ぎてから、裕理の家へと飛んでやってきていた。いつものように窓から入ろうと思ったけど、開いてない。

部屋の電灯もついていない。

だから玄関から、入っていった。

「こんばんは〜、ってあれ? アメリカお姉ちゃん?」

「やつほー、ゆーみん。待ってたよ」

「あれ? あれ?」

ゆみながリビングに入ると、ソファでくつろいでいるアメリカがいた。

まるで家主のように、TVを見ながらお菓子を食べている。

「どうしたんですか？ お兄ちゃんは……」

「ユウはお出かけ。また太転依だつて」

「ふわ。最近多くなりましたね……」

「そうね。で、あたしはお留守番ついでにゆーみんへの伝言係つてわけ。せつかく人が遊びにきてあげたのにほつたらかしよ」

不満げなアメリカに、ゆみなは苦笑する。

「ゆーみんからも言わないとダメよ。忙しすぎててもロクなことにはならないんだから」

「そうですよね。最近、お兄ちゃん頑張りすぎかもしれないせん」

「でしょでしょ？ だからさ、レンタルで借りた映画を一緒に観させてやろうつて持ってきたのよ」

テーブルの上にレンタル店のケースがおいてある。

レシートを見ると、返却期日が明日までだ。

アメリカを良く知るゆみなだからこそ分かるが、これは借りたはいいけど観ずにずるずると返却ぎりぎりになってしまい、慌てて観ようと思つたけど、一人じゃ観るのに飽きてしまいそうだから、裕理を誘つたつてことだろうと。

「ゆーみん、一緒に観ない？ 一人じゃ飽きちゃうからさ」

「あ、はい。いいですよ。何の映画ですか？」

「戦争映画。結構昔のヤツなの」

「どうして戦争映画なんですか？」

「派手で面白いかなーつて思つたんだけど……ちよつとイメージと違うみたい」

アメリカがDVDをセットし、ゆみながアメリカの隣に座ると、上映会が始まつた。

最初、新米の兵隊達が憂鬱そうな顔で頭を丸刈りにされていくシーンが淡々と流される。

「ね？ この始まり方、地味じゃない？」

「これは一応反戦映画ですから」

「ゆーみん、観たことあるの？」

「はい。有名ですよ」

「派手なシーンつてある？」

「反戦映画ですから、多分アメリカお姉ちゃんが思うような派手なシーンつて無いんじゃないかな？ 衝撃的なシーンは沢山ありますけど」

「ふん……」

言葉少なめに、二人はポーツと画面を見続けている。

訓練所の教官が、新米の兵士たちに罵声をあびせているシーンを観ながら、二人はお茶を飲んでおせんべいを食べている。

「ここ、有名なシーンなんですよ」

「え？ これが？ 下品なこと言つてるだけじゃない？」

「そこが生々しくて迫力があるつてことで、ファンもいるんですよ」

「へえ……」

まったく関心のないアメリカだが、ゆみなはそのシーンを食い入るように見てしまう。

前に観た時は気づかなかつたものがそこにあるのを発見したかのように、見入っている。

「そうですよ……これですよ……何故気づかなかったんでしょう……」  
「え？ これって？」

映画は、ひたすら新兵の訓練シーンの連続でしかない。

教官の上品な罵声ばかりが、画面下の字幕に表されている。

アメリカは首をかしげた。

「これです。ゆみなに必要なものは、これだったんです」

アメリカは画面に出てきている、訓練所の教官を指さす。

「……これ？」

「……………」

アメリカの質問に、ゆみなは応えない。

応えないけど、らんらんと光るゆみの目は、まさしくその教官に注がれていた。

「そうです……厳しく教えなければなりません……相手はあのミレディです……そんじょそこらの厳しきなんて、易々と乗り越えてしまう……如月先輩はミレディ・ザ・ミレディなんですから……」

ぶつぶつと何かを言っているゆみなを見て、アメリカは思わず口にする。

「……すつごい目力<sup>めぢから</sup>」

応龍がいたら、間違いなくそう言ってただろう。

次の日、ゆみなどは準備があると美冬に告げて、先に行ってしまった。

美冬は雑務を終えて、昼時を過ぎてからフロアレスを出た。

「一緒に行ってもいいのに、ゆみなどはせっかちだな。外出許可がよほど嬉しかったのかな」

「そうじゃの。前から落ち着きのないヤツと思つとつた」

「ははは、鶴に言われるということは、よつぽどだ」

何故か、鶴が美冬のそばにいた。

元々、美冬が料理を覚えようと思つたのは、鶴がましろの手料理を食べ、美冬に作ってくれと要求したのが始まりだった。

だから鶴は、美冬がゆみなどに料理を習うと聞いて、急いで帰ってきたのだった。

「美冬。ゆみなどは何を教えてくれるんじゃ？」

「肉じゃがは言っておいた。だから多分教えてくれるだろう」

「おー、たのしみじゃの、たのしみじゃの。あの白い獣がゆみなのこと、べた褒めだったからの」

鶴に言われるまでもなく、美冬も楽しみにしていた。

子どもの頃は、料理に興味があつたのだが、如月家の方針から台所に立たせて貰えずに過ごしてきた。

料理とは、その料理を作る職を持つものがやるべきで、職域を犯すべきではないという家の方針でもあり、多くの人の上に立つ者としての学問を優先的に身につけるべしという方針でもあり、美冬は台所に立たなかつたし、立てなかつた。

今回は、美冬の我が儘で実現した。

たまにしかない休日を、料理を学ぶことに使うという美冬らしい真面目さであるが、彼女にとってそれは趣味娯楽レベルで学ぼうということであった。そして学ぶからには真面目に真剣にやる。だから教えてくれる人には厳しく接して欲しいと思っている。そういうつもりで、美冬はゆみなに厳しくしてくれと告げた。あくまで、料理をしつかりと学びたいから、という意味だった。

美冬と鶴は、ゆみなの案内で泉戸家の台所に通された。

何度も来ている泉戸家だが、ここまで通されたのは少ない。

古いながらも綺麗に整えられた台所は、使用者の性格が出ていると、美冬は思った。

「ここでゆみなのは裕理の母に料理を習い、ましろはゆみなに料理を習ったのだな」

「美冬。ほらここにじゃがいもがあるぞ。やっぱり教えるのは肉じゃがじゃな？」

「……………」

「ゆみな？ どうしたんじゃ？」

「……………」

鶴がゆみなに質問をするが、ゆみなのは応えず背中を向けてじつとしてている。

美冬と鶴はお互いに顔を見合わせる。

ゆみなの様子がどうもおかしいと、美冬も鶴も思っていた。

二人は視線を交わしたことで、互いに今日のゆみながおかしいと思っていることを確認した。

美冬が背中からゆみなの肩に手を置く。

「ゆみな。いったいどうした……」

くるつと振り返ったゆみなの形相に、美冬は驚いた。

目がららんと輝き、瞳孔の開いた視線に、思わず釘付けになる。

「触れないでくださいっ！」

突然、ゆみなの手に握られたものが振られ、美冬の目の前に突きつけられる。

「ん!？」

びゅうつという風切り音がさいた後、震える棒状のものを、ゆみなが構えている。

それは教鞭だった。

ゆみなが教鞭を振る。

比喻ではなく、本物の鞭を振っている。

「ゆ、ゆみな？」

頭上に疑問符を浮かべる美冬を気にすることなく、ゆみなのはビュウツと教鞭を鳴らす。

「気をつけーっ！」

ゆみなの声が台所に響く。

立て付けの悪い、古い窓ガラスが本当にビリビリと震えている。

ゆみなの様子に、美冬は思わず硬直した。

「これから教えを請う教官の肩に、気安く触れてはいけませんっ！それが生徒の節度ですっ」

「……え？ え？」

ゆみなは後ろ手に組んで、胸を張る。

張りつめた不動の姿勢から漂う緊張感。

その緊張感がそのまま声になり、台所に響いた。

「気をつけええーっ!!」

美冬と鶴は再び顔を見合わせる。

美冬、どうしたんだゆみなは？ いやわからない、わからないがここは従った方がいいと思う。

うん、わしもそう思う。

と僅かばかりの間に、お互いにお互いの意志を察し、二人は気をつけの姿勢をとる。

二人は、この台所の主たる者の声に従った。それが今この状況に最も適しているのではないかと踏んで。

つまり、空気を読んだ。

そして、空気を読む行為は、時に人をさらなる混沌へと導く。

「おはよう生徒諸君。私わたくしがこのたび、料理を教える役目をおった小遊鳥ゆみなです。ここでは教官と呼びなさい」

「生徒諸君？」

「教官？」

首をかしげる美冬と鶴を無視して、ゆみなは続ける。

「いいですか！ ここでは教官が質問するまで口を開くことを禁止します！」

「……………」

「他の教官はどう言ってたか知りませんが、私はそこまで甘くない！ 私語禁止！ 口を開くには教官の許可が必要です！」

「何を言っておるのだ、ゆみな？」

鶴の質問に対して、ゆみなの瞳がぎろりと向いた。

いつものゆみなとはまったく違う反応に、鶴は戸惑い硬直する。

「聞こえなかったんですか？ 私の許可なくして言葉を発することはならないと、言いましたよね？」

「そ、そんなのしらん」

「気をつけえええーっっ!!」

「ひっ!!」

再び空気を震わせるゆみなの気合いと共に、教鞭の切っ先が鶴の顔の目の前に突きつけられた。

「ここでは私が絶対です。絶対権力者です。独裁者です。いいですね？」

「な、なぜ……」

「教官が質問するまで口を開いてはいけないというわけですよ。もう二度と言わない。わかりましたか？」

「……………」

「わかったら、頭と後ろにサーをつけてイエスと応えるのです」

「さー？」

「サー、イエスサー、です」

「さー、いえすさー……」

「声が小さいですっ!! それじゃ聞こえませんか!!」

「さー、いえすさー!!」

「それで声を出しているつもりなんですか? あなたの声帯はそんな音量しか出ないんですか? いいえ、いいえ、そんなわけありません! もつと声を! もつと声を! 腹からひねり出すようにっ!!」

「な、何を……み、美冬く、ゆみなが……」

鶴は助けを求めるような視線を美冬に向け、情けない声をあげる。

ゆみなの教官つぷりに唾然としていた美冬も、ようやく冷静さを取り戻し、ゆみなに声をかける。

「なあゆみな、どうしたんだ? いったい何があった……」

「……むっ!」

「ゆ、ゆみな……」

「禁止ですと言ったじゃないですかっ! 私語禁止! 私語禁止!! 私の許可なく私語厳禁!!」

これ以上の屈辱はない、怒りはないとばかりに、ゆみなの怒髪が天を突く。

鶴の鼻先数センチのところを、教鞭が振られる。

「ひよえっ!? ゆみなが美冬に鞭を向けておる……」

鶴も美冬も驚きを隠せていない。いないが、美冬はおそろおそろ対応した。

「……教官。発言の許可を」

「よろしいです。さあどうぞ」

「こちらの鶴は、見学ということではよろしいですか?」

「見学? 生徒ではないのですか?」

「はい。元々、料理を習いたいと言ったのは私です」

「ふむ……わかりました。では鶴さんは、こちらの席へ」

椅子をひいて、鶴を座らせるゆみな。

それから再び直立不動の姿勢で美冬の前へ出る。

「生徒はあなた一人、でよろしいですね?」

「は、はい」

「サー! イエスサー! ですっ!!」

「さ、サー、イエスサー!」

「声が小さいです! やり直しですっ!」

「サー! イエッサー!!」

「よろしいです! では教育を始めます!!」

「あ、その前にもう一ついいですか?」

「……」

すさまじい敵意のこもったゆみなの視線に、美冬は絶句する。

いったいどうしたのか、ゆみなはどうしてしまったのか、まるで理解できない。

「高貴なお嬢様は質問が多い!」

「は、はい、申し訳ありません」

「申し訳ございません、サー! です」

「申し訳ございません、サー!!」

「よろしいです。では特別に発言を許可しましょう。手短に簡潔に発言するように！」

「はい……じゃなくて、サー、イエッサー！ ……ええと、何故、軍隊のような真似事を？」

「口を慎しみなさいっ!!」

「は、はいっ」

「サー、イエッサーです！ 何度言ったらわかるんですかっ!!」

「サー、イエッサー！」

言った後、美冬はハツとする。

完全に乗せられている自分に驚かされる。

何より、この目の前にいるゆみなに、いったい何があつたのかわからない。

「軍隊の真似事とおっしゃる……つまり私を侮辱すると、教官を侮辱すると。それは不敬です。

教官に対する敬意がありません。慎み深さに欠けます」

「それが学ぶ者の態度ですか？ いいえ違います！ いいえ違います!! それで何も覚えられない。何も学べない」

「いいですか、生徒如月美冬さん。今、あなたが置かれた立場を客観的に冷静に、明鏡止水の心で受け止め切れてますか？」

「サーイエっ……」

「ノンノン!! 受け止め切れてませんっ!! びた一文たりとも受け止めてませんっ!! そのつもりになっているだけですっ!!」

「さ、サー、イエッサー」

ゆみなは後ろ手に組みながら、美冬の前をうろうろと歩き出す。

「いいですか生徒如月美冬さん。この台所という戦場において、あなたは何ができますか？ いったい何ができますか？ そう、何もできない。何一つできることがない。戦場では死に直結します。それどころかっ!! いいですか、今から大切なことを言います！ メモのご用意を!!」

美冬はメモと言われ、生徒手帳とペンを取り出す。

反射的に行動してみたものの、この状況をあまり理解できていない。

「戦場で何もできない者がいるっことは、つまり仲間の死すら意味をするのですっ!!」

「そ、そこが大切ですか、サー」

「私は発言の許可をしていない！」

「失礼いたしました、サー」

「人の話というのは最後まで聞くものですっ!!」

「サー、イエッサー」

「よろしいです。では続けます！ 仲間の死を意味するだけの存在には意味もなければ価値もない。邪魔でしかない。むしろマイナス要因、ウィークポイント。私は、そんなあなたを救う者ですっ! この台所という名の戦場にてっ、まともな家庭料理を身につけるその日まで、私はあなたの絶対者として君臨しますっ! 生徒は絶対服従ですっ! 教官が鹿を馬と呼んだならば、生徒も馬と呼びなさい。わかりましたかっ?」

「……え？」

「わかりましたかっ!？」

「い、イエッサー……」

戸惑い、控えめに口にする美冬に、ゆみなの殺意の籠もった眼光が閃く。

「気合いがたりませんっ!! もっと大きな声でっ!!」

「さ、サー、イエッサー」

「そんな蚊の鳴くような声が気合いですか？ 気合いですか？ 違います！ 断じて違います！ 認めません！ 絶対に認めません!! さあもう一度!! 生徒如月美冬さん。あなたの気合を見せてくださいっ！ やる気を見せてくださいっ!!」

「サー！ イエッサー!!」

美冬は、直立不動で応じる。

応じながらも、理不尽と不条理を感じ、眉間にしわを寄せる。

ゆみなはそこに目敏く気づく。

「生徒如月美冬さん。不満ですか？」

「……………」

「価値はないと、邪魔でしかないと、マイナス要因だと、ウィークポイントだと言われたことに不満ですか？」

「…………サー、イエッサー」

ゆみなの眉の片方がグイッと持ち上がる。

こいつは可笑しいとばかりに、目を見開いて笑顔になった。

そしてぱちぱちと拍手をする。

静まりかえった台所に、パチパチパチとゆみなの乾いた拍手だけが音となって軽く響く。

その不気味なムードに、美冬と鶴は呆然とする。

「いい気合いです！ 勇気があります!! 流石ミレディ、一軍の将たる器です!! 私は感動しましたっ!! だがしかしっ、だがしかしです!! 生徒が教官に口答えなど許さない!! 絶対にゆるさない!! そんな生徒には鉄拳制裁ですっ!! アイアンパンチです！ えやっ!!」

ゆみなの固められた拳が、美冬の腹めがけて繰り出される。

しかし、パストという音が鳴っただけで、美冬は倒れたりうずくまったりしない。

「えいっ！ えいっ！ えいっ！ えやっ！ ……どうです？ 鉄拳制裁です。痛くても泣くことは許しません!!」

「…………サー、イエッサー」

「これに懲りたら二度と逆らわないことですっ」

殴ったはずのゆみなが、痛そうに手をさすっている。

美冬は苦笑もできず、ただ困っていた。

「…………サー、イエッサー」

ベクトルは違うが、確かに逆らうのには懲りた。

ここはゆみなの好きにやって貰おうと思った。

「いいですか！ 生徒如月美冬さん！ この訓練は熾烈を極めます!! 泣いたり笑ったり怒ったり喜んだり悲しんだり戸惑ったり怖れたり出来なくなっちゃいます!! 喜怒哀楽など悠久の彼方ですっ!!」

「サーイエッサー!」

戸惑っている美冬が、ちらりと鶴を見る。

黙ってこつちを見るが、あからさまに戸惑っている。

美冬、これはなんだ？ 私にもさっぱりわからない。そんなアイコンタクトを続けるが、それ

以上の答えが出ない。

そんな二人の不安に構いもせずに、ゆみなは美冬にぐいっと顔を近づける。

「生徒如月美冬さん。何故、料理を習いたいと？」

「それは……美味しい料理を作りたいと思っただけからです……サー」

「美味しい料理を作つてどうするつもりですか？」

「鶴や友人らと一緒に食べます、サー」

「料理人志望ではないのですか？」

「サー、イエッサー」

「料理人になるつもりがないのに、料理を習いたい……ですか…… おふざけになっていらつしやるのですか？」

「え……いや、ふざけるなど……」

「では料理を舐めていらつしやるのですね……下々の者が手を汚すのが料理と、そう思つていらつしやるのですね……そうですか……」

「いや、違……サー、ノーサー!!」

「料理をなめるんじゃないですよ!! そんな態度で料理が身につくとお思いですか? お思いですか? 心外です!」

「サー、ノーサー!」

「舐められたものです。私もなめられたものです。じゃがいも代わりにあなたを鍋にかけてやることもできるですよ!! ふかしてやることもできるですよ!!」

「サー、ノーサー!」

「いいですか生徒如月美冬さん! これから家庭料理を習うのです! 死ぬ気で覚えてください! きつちり覚えてください! それができなければこの台所で一生過ごすことになります! 出来るまで閉じ込めます! 如月財閥の救助隊が来るまで籠城です!!」

「サー、イエッサー!」

「むつ、その見学者! 何がそんなに可笑しいんですか?」

ゆみなが笑いを堪えている鶴に気づく。

上から見下ろすように鶴に顔を近づける。

「くつくつく、だ、だって、籠城つて……こんなところで籠城なんてできるわけなからうて……」

「そうですか、それが面白いのですか……そうですかそうですか……笑つてくれてありがとうございます」

「……あ……う」

目を見開き、瞳孔すら開ききつた視線に、鶴は射すくめられる。

「さあ、笑つてください。素敵な笑顔を見せてください。多くの男どもを狂わせる可憐でみだらな笑みを、お見せになつてください」

「……さー、いえっさー」

「どうしたんですか? ひきつつておりますよ? それでお笑いになつておつもりですか? う……」

「なんなら面白いコントでもどうでしょう? お笑いをご所望の様子ですので。生徒如月美冬さん。この見学者がお笑いをご所望ですよ」

「あ、ゆ、ゆみな、その……別にいいから。笑ってわるかった」  
「……教官です」

「あ、はい。教官様」

「わかりました。でも見学者様、ここは料理を習う台所です。先ほどのように笑われては困ります。士気に関わりますので」

「は、はい……すまぬ……」

美冬の絶句は続いている。

あの鶴が言葉で敗北してる……謝っている……。

それに、あのつぶらな瞳に涙をためて、いるみたいだ。

ゆみな、いったいどうしたのだ？

そんな美冬の疑問も、この状況にかき消えた。この状況を作った発端は、美冬が厳しくと言ったからだった。

しかし、もはや発端から遠く離れた様相を呈していた。

端的に言えば、迷走していた。

ゆみなな様子はまともじゃないが、教えている内容そのものは、まともだった。

まず調理道具の簡単な説明から入る。

コンロの扱い方から始まり、泉戸家の台所に揃えている鍋やフライパンの類を説明していく。どれもこれも使い込まれているが、綺麗にしてある。

この台所を扱っている人柄がにじみ出ている。

「今日使う鍋はこれです。大切な道具です。かいつまんで言えば、生徒如月美冬さんよりも上位です。敬意を持って接してください」

「サー、イエッサー！」

「声が小さいですつ！ 気合いですつ、気合い!!」

「サー、イエッサー!!」

天下の如月財閥の後継者を、ゆみなは泉戸家の鍋より下に置いた。

そして鍋の使い方を教えた直後、ゆみなは料理雑誌を手にしてページを開く。

そこには色合いの鮮やかな肉じゃがの写真と、レシピがびっしりと書かれてある。

鶴が少しだけ嬉しそうな顔をした。

ましろの言っていた、ゆみなな肉じゃがが食べられると思うと、笑顔にもなってしまう鶴だった。

「今日は肉じゃがの作り方を教授いたしますつ。この写真にある料理です。わかりますか？」

「さー、いえっさー!!」

その返事は鶴が言ったものだった。

ゆみなはその返事に、いい返事です、とばかりに笑顔で応える。

鶴は嬉しそうに、その本を近くで見ようと寄っていった。

「これを読めば、肉じゃがはあっさりできあがりです。簡単です。そのためのレシピブックですから」

「わしにでもできるのか？」  
「できます」

「おおっ……うれしいのお。うれしいのお」

「では、鶴さんも一緒にやりますか？」

「さー、いえっさー!!」

鶴が、この料理教室に参加した。

「では、早速作り方を覚えてもらいます」

「さー、いえっさー!!」

「まず最初に……この本を破きます」

「さー、いえ……え？」

「この本はいりません」

ゆみなは、おもむろに雑誌をひきちぎろうとする。

「えいつ！ えいつ！ えいつ！ えええいつ!!」

しかし、ひきちぎれない。

手の方を痛そうに、ぶらぶらと振る。

「生徒如月美冬さん。この本を破いてください」

「……さー、イエッサー」

美冬が楽々と本を破く。

破いた本を、そのままゴミ箱に入れる。

ちらりと鶴の方を見ると、悲しそうな顔をしてビリビリに破けた本を見ている。

美冬は、いたたまれない気持ちでいつぱいになっていた。

「生徒如月美冬さん、ありがとうございます。さて、私が何故、本を破いたか。それは生徒の体に肉じゃがの作り方を刻むつもりだからですっ!!」

「料理は言葉ではありません。活字ではありません。体で作り、体で吸収するものなのですっ!」

「………」

「今の言葉、メモです」

「さ、サーイエッサー」

なんだその無駄な厳しさは、と美冬は思うが口にしない。

しかし、ゆみなは美冬の不満に気づく。気づいてしまう。

「生徒如月美冬さんは、レシピブックで楽に作りたかったですか？」

笑顔のゆみなから発せられる怒りの気配。

美冬はそれを敏感に感じ取った。

「さー、ノーサー!」

「本当ですか？」

「さー、イエッサー!」

「簡単に覚えたものは消えていく宿命です。体に覚えさせ、血となり肉となり骨となり、そして初めて覚えたと言っているのですっ」

「さー、イエッサー!!」

「だから厳しくなければならぬのですっ! 全てを会得するには、厳しい環境に身を投じねば

ならないのですっ。違いますか？ 違いますか？」

「サー、ノーサー!!」

「流石です、流石です生徒如月美冬さん！ やはりあなたは本物を見極める才能があります!! その意気込みに私は応えます!!」

ゆみなは、じゃがいもの入った袋を掲げる。

「まずはじゃがいもの皮むきですっ!!」

美冬と鶴はシンク横の調理台に並ぶ。鶴には踏み台の上に立つ。

「わ、わしは、おそわらない方がよかった……のか？」

「鶴。もうそういう雰囲気ではない」

「とほほ……」

「私語は厳禁ですっ！ 黙々とやってくださいっ!! 静かに!! 音もなく!! 気配も感じさせない暗殺術の使い手のよーにつ!!」

「さー、いえっさー!!」

ゆみなの料理教室が、本格的に始まった。

めちやくちや言っているが、ゆみなの料理法は教科書通りともいえるものだった。

しかも生来の性格から、一つ一つがとても丁寧であるため、細部まで余念がない。

じゃがいもの皮むきも、ピラーを使わずに包丁で行う。

手の小さな鶴には、果物包丁を渡していた。

皮のむき方も、丁寧に教えていく。

だから、皮に実の部分が残っていると、あの調子で怒った。

「これはなんですか生徒鶴さん。こんなに皮に実の部分を残しているではありませんか」

鶴の剥いた皮を手にして、ゆみなが鶴を注意する。

「ここに、食材に対する姿勢が見えます。我々はこのような野菜から、命をもらって生きていま

す。敬意があればこのような皮の剥き方ができるわけがありません」

「わ、わしは太転依だから……別に野菜から得なくても……」

「口答え禁止ですっ!!」

「い、いえっさー」

有無をいわさないゆみなの態度に、鶴は滅入っていた。

せっかくの料理学習を楽しもうにも、楽しめるはずがなかった。

ここは早々に終わらせようと、美冬は黙々と調理を進める。

ジャガイモの皮を剥き、六つ切りし、面取りし、水にさらしてあくぬきをする。

その間に、たまねぎとにんじんを適度な大きさに切っておく。

それから鍋に入れて強火で煮る。

コトコトと音をたてて、水蒸気をあげる鍋。

その間も、美冬と鶴は、直立不動の姿勢をとられる。

美冬は元々武術の訓練を受けていて、直立不動の姿勢は慣れている。

しかも料理をすることは楽しい作業だと思っていた。

ゆみなの指示も射を射ていて、ましろが習ったと言ったのも、あらためて世辞ではないと思うに至っていた。

だから余計に、どうしてゆみなが妙な方向に気合いを入れているのが、理解できない。

そんなことを、手を動かしながら考えていたため、鶴の様子に気づかなかった。鶴はじつとしていることに慣れておらず、集中力はすでに切れていたのだ。

「うゝむ……そろそろお肉を入れないのか？」

「慎むのです！ 生徒鶴さん！」

「……さ、さーいえつさー」

用意した豚肉に触ろうとした手をひっこめ、鍋の方へ。

「十分も煮るのか？ 長いぞ」

「長くありません」

「む……」

「長くありません。これくらい手間をかけてこそ、料理はおいしくなるんです」

「……十分も何もすることないのか？ 暇じゃぞ」

「暇ではありません。この間に、料理人は食材やそれを提供してくれた自然や人々に感謝をするのです。さあ、感謝の心を捧げてください」

「むー、そんなこと、ようわからん」

「……生徒鶴さん」

「な、なんじゃ、いいじやろ？ わしは太転依じゃ。おぬしらの考えとは違うのじゃ」

「人と太転依は違う。考えも違う。わかります。私にもわかります。しかしここでの支配者は私です。教官小遊鳥ゆみなです。ここでは私に従うのが筋なのですっ！ さあ、生徒鶴さん。気をつけをして、感謝を捧げなさい。ここでは私の言うことを聞きなさい。聞き分けのない子は嫌いです」

「むう——っ。いやじゃいやじゃ。もういやじゃ」

「いやじゃいやじゃで肉じゃがは出来ませんっ！ 我が儘禁止！ 駄々コネ厳禁!! じつとしてなさい!!」

「いやじゃーっ。こんなのたいくつじゃー」

鶴の円らな瞳に涙が溜まり、ぼろぼろとこぼれていく。全身をばたつかせて、不満をアピールする。ゆみな頬がピクピクとひきつり始めている。

怒りを堪えているのだろうが、そろそろ限界に近づいている。美冬はそう思い、直立不動を解いた。

「鶴、ここはもう少しつきあってくれ」

「付き合う必要はありません、生徒如月美冬さん」

ゆみなは、泣き出した鶴の襟首を無造作につかむ。

「ひえっ!? な、なんじゃ？ なんじゃ？」

「私は今、怒ってます。猛烈に怒ってます。自分を制御できません！ 寛容の心が消し飛びそうですよ、生徒鶴さん!! 言っても聞かない生徒にはおしおきです。おしりペンペンしますっ！」

「なっ!? そ、そんなのいやじゃ」

「イヤとかイヤじゃないとか、そんなものはとうの昔に通りすぎ、今は罪がある者と罰を与える者との関係があるだけに過ぎませんっ!!」

ゆみなの目がらんと輝いている。

その視線が、鶴にだけ注がれている。

「ひええええ、ゆ、ゆみな……やめるのじゃ……」

ゆみなから何かを感じとった鶴は、腰がひける。

何かとは、ゆみなの怒気に鳳凰の神通力が混じったようなものだ。

それをぶつけられたら、怪我だけじゃ済まない力を感じていた。

「さあ！ おしりペンペンですっ!! 赤く腫れあがるまでぶちかましますっ!!」

「なっ、や、やめろ、ゆみな……」

「ふっふっふ。なーに鶴さんならこんなことで死んだりしませんよ。ちょーつと、動けなくなるかもしれません……」

「いやじゃっ！ やめるのじゃっ！ 美冬っ、美冬、助けてくれっ」

ここにきて美冬もようやく事態の重さを察し、ゆみなと鶴の間に入る。

「ゆ、ゆみな……じゃなくて教官。ここは私の方からキツク言っておきますから……」

「いいえダメです。私の気が晴れません。ちつとも晴れません。この我が儘な子どもにおしおきですっ！ これはおいたが過ぎた子どもに向かって振り下ろされる愛の鞭ですっ!! さあ鶴さんっ。ケツを出しなさい。私がこの教鞭でびしっつと打ち叩いてやりますからっ!!」

「ひっ……ふあ、ぶわわわわわっ、ゆみながいじめる——!!」

台所で鶴が泣き出した頃、リビングから様子をうかがっていた者がいた。

遊びに来たアメリカだ。

裕理とゆみながいるだろうと思い、今日が返却期限のレンタルDVDを持って遊びにきていた。泉戸家の母屋に裕理は留守で、代わりにゆみなと美冬と鶴がいるのを見つけた。

美冬がいるなんて珍しいと声をかけようと思ったが、ゆみなの雄叫びを聞いて様子がおかしいと、話しかけるのをためらっていた。

それからアメリカは、鶴が泣き出すずっと前から、台所の様子を見ていたのだ。

そして……裕理に連絡をとっていた。

「ただいま。アメリカ、ゆみなちゃんはどうしたって？」

「ユウ、遅いよ。なんかゆーみんなが変なのよ。どうしちゃったの？」

「どうしたって……今日は美冬さんに料理を教えるって言ってたよ？ だから台所を貸してほし  
いって」

「それは見てればわかった。料理を教えているって。でもなんで……鬼教官モードなの？」

「鬼教官モード？」

裕理が台所を覗く。

そこに展開されているのは、ゆみなが鶴を泣かしているところで、美冬が必死になってかばっているところだった。

「……何これ？ どんな状況？ わけわかんない」

「あたしだってそうよ」

「何故に鶴が泣いているの？ 何故にゆみなちゃんがあんなに大迫力なの？」

「知らないってば。いいから止めて、ほら、早くっ」

「あ……う、うん……」

十数秒、様子を見て怯んでいた裕理だったが、アメリカに背中を押され、急かされるように台所

へ踏み込む。

「ゆみなちゃん、ただいま……ど、どうしたの？」

「あ、八衢やちまた」

「裕理！ いいところに来た」

その様子を後ろから見て、アメリカは思う。

こいつはただ事じゃないと。

あのフロールスを統率してると言ってもおかしくない美冬さんが、あの三強の一人の鶴が、圧倒的な強者の悪逆非道から、助けを求めたただの被害者のような視線を裕理に向けている。

「ど、どうしたの？ いったい何が……」

「勝手に入っちゃいけませんっ！」

「……へ？」

「台所は女の聖地、サンクチュアリですっ！ 男が土足でどかどかと踏み入れていい場所じゃありませんっ、早々に立ち去っていただきたいっ！！」

「……………はい」

と素直に返事をして、後ずさりする裕理の背中を、アメリカが押し止める。

「あんたが逃げちゃダメでしょ？ 早く何とかしなさいよ」

「あ、うん、そうだった。あやうく吞まれるところでした」

台所にとどまる裕理が、ゆみなに話しかける。

「ゆみなちゃん、どうしたの？ 鶴が泣いてるけど……それに美冬さんも困ってる様子だし

……」

「これは愛の鞭です!!」

「……その手に持つてるものが？ ただの鞭にしか見えないけど？」

「ゆみなが手にすることで愛が込められるのですっ!!」

「……………」

裕理が困って美冬さんの方を見る。

美冬は首を振って、自分も困っていると暗に示した。

「さあ、鶴さんをこちらへっ!! おいたが過ぎた子どもに、愛の鞭を!! ラブウィップを!! お

兄ちゃん、鶴さんの体をおさえつけてくださいっ！」

「ちよつと抑えて、ゆみなちゃん」

裕理がゆみなの両肩を掴む。

ぎゅつと掴んだ瞬間、小さいがバチツと音がした。

「はうあつ……きゆう……」

それだけで、ゆみなはその場に倒れるように気絶する。

裕理は慌ててゆみなの体を抱き止める。

「あれ？ 何？ どうしたの？ ゆみな？」

台所に漂っていた圧迫感が、あつさりと霧散する。

ゆみなを優しく抱き止めている裕理と、心配で駆け寄ってきたアメリカを、美冬と鶴はぼんやりと見つめていた。

強権的な支配者からようやく解放され、もうこれ以上畏れる必要がないということの解放感と、全神経を注いでいたものがなくなるという喪失感が、美冬と鶴の心を占めていた。

「……わしらはたすかったのか？ 美冬？」  
「ああ、どうやらそのようだ」

明るる日、同級生らと一緒にいたゆみなが、美冬と鶴の姿を見つけた。

「如月先輩。おはようございます」

「あ、ああ、ゆみなか。おはよう」

「鶴さん、おはようございます。お久しぶりですね」

「……………」

鶴が美冬の後ろに隠れ、ゆみなをおつかなびつくり見ている。

「あれ？ 鶴さん？ どうしたんですか？」

「……寄るな」

「え？ どうして？ あつ、鶴さん……」

「ゆみなは寄るな〜」

鶴は美冬から離れ、走り去ってしまった。

「鶴さん、どうかなさったんですか？」

「さあ……ところでゆみな。どうしたのかな？ 何か用事があつて声をかけたのでは？」

「あ、はい。えつと、土曜はすみませんでした」

「……………あ、ああ」

「なんか貧血で倒れてみたいで……何で倒れたのか覚えてないんですけど……」

「そうだな、貧血だったな……そういうことにしたんだった」

美冬は裕理から聞いていた。

ゆみなは、土曜日のことをまったく覚えてないという。

あの最後に裕理が止めて気絶する前からの記憶がないという。

いったいどうしてあんなったのか、そもそもものきつかけは何だったのか、詳しくは分からない。

あの場にましろでもいたら、分析してくれるかもしれない。

鶴も、あと何日か経てば落ち着いて、分析してくれるだろう。

いつもの鶴に戻るだろう。

「大丈夫か？ あまり無理せずにな」

「はい、ありがとうございます。もう大丈夫ですから、時間ができたら言ってください」

「え、ああ……うん、そうだな。その時がまた来るようなことがあつたら頼む」

「お兄ちゃんに台所を借りますから」

「それだけは止めてくれ」

「え……」

「あ、いや。時間がないから調理実習室を使った方がいいかな」

「あ、そうですね。すみません、気がつかなくて」

ゆみなが、申し訳なさそうに言う。

その様子から、一昨日のゆみなを想像できない。

いつた彼女のどこから、あんな気迫が出ていたのか。

あれは勘違いだったのかもれない、と美冬は思った。

「時間ができたらよろしくな、ゆみな」

「はい。作りたいものがあつたら言つてくださいね」

「サー、イエッサー！」

「……へ？」

「あ……」

美冬は、びしつと気をつけの直立不動の姿勢をとつてしまった。

しまったと思うがもう遅い。

ゆみなの同級生たちがいる前でやってしまった。

他にもたくさんの女生徒が見てる前で、美冬はやってしまった。

「ど、どうかしたんですか？」

「いや、何でもない。忘れてくれ」

この光景は、尾ヒレがついて広まった。

入学してまだ夏休みにも入っていない。なのにミレディを服従させている。

ゆみなは、同級生どころか、上級生からも尊敬の視線を集めることになった。

後にゆみなが裕理と結婚し、フローレスを退学する時、フローレスの生徒のほとんどは、彼女ならありうると納得することになる。